

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごへんじ

兵衛志殿御返事

いちぞくまつだいさか

こと

（一族末代栄えの事）

新版
1497
〜
1499

ひょうえのさかんどのごへんじ いちぞくまつだいさか

こと

兵衛志殿御返事（一族末代栄えの事）

こうあんがんねん

弘安元年（'78）

57歳

さい いけがみむねなが
池上宗長

おん 文 書

そうろううえ だい 弑 阿闍梨

語 そうろう

御ふみにかかれて候上、大にのあざりのかたり候は、

銭 じゅうよ 連 並 様 々 もの そうら

ぜに十余れんならびにようようの物ども候いしかども、

当 時 農 時 ひと

とうじはのうどきにて□□□□人もひきたらぬよし□□□

およ そうら ひょうえのさかんどの おん

□も及び候わざりけ□□□□兵衛志殿の御との□□□

おん ふうま そうろう もう そうろう

□御夫馬にても□□□□て候よし申し候。

そ ひやくさいこく にほんこく ぶつぼう 渡 そうら

夫れ、百済国より日本国に仏法のわたり候いしは、大船

乗 いま 淀 がわ 淡 海 みずうみ 着

にのせてこれをわたす。今のよど河より、おうみの水海につ

そうろう

しや

らくよう

運

そうろう

けて候ものは、車にて洛陽へははこび候。それがごと

鎌倉

ものひと給

そうろう

ふ

く、たといかまくらにいかなる物を人たびて候とも、夫と

うま

いのち

助

そうろう

馬となくば、いかでか□□が命はたすかり候べき。

とくしようどうじ

つち

もちい

ほとけ

あいくだいおう

□徳勝童子は、土の餅を仏に□□□□阿育大王と□□

供養

そうら

あいくだいおう

だいいち

□□くようしまいらせ候いしゆえに、阿育大王の第一の

だいじん

らだいきち

いちえんぶだい

おん

後

見

大臣・羅提吉となりて、一閻浮提の御うしろめ、いわゆる

大

どの

おんとき

ごんのだいぶどの

かれ

似

おおい殿の御時の権大夫殿のごとし。これは彼らにはにる

だいくどく

ぶま

金

泥

駒

おん

べくもなき大功徳。この歩馬はこんでいこまとなり、この御

殿

びと

車

匿

舎

人

ほとけ

たも

との人はしやのくとねりとなりて、仏になり給うべしと

思 おぼしめすべし。

過 尊 そもそもすぎしことなれども、あまりにとうとく、うれ

もう しきことなれば申す。

むかしな ら なこく ま からおう もう だいおう か だいおう
昔波羅捺国に摩訶羅王と申す大王おわしき。彼の大王に

ふた たいし 二りの太子あり。いわゆる、善友太子・悪友太子なり。善友

たいし によいほうしゅ も 太子の如意宝珠を持ちておわせしかば、これをとらんがた

弟 あくうたいし あに ぜんうたいし まなこ 抜 たま
めに、おとの悪友太子は兄の善友太子の眼をぬき給いき。

むかし だいおう いま じようぼんおう ぜんうたいし いま しゃかぶつ あくうたいし
昔の大王は今の浄飯王、善友太子は今の釈迦仏、悪友太子

いま だいばだった きようだい 宝 争
は今の提婆達多これなり。兄弟なれども、たからをあらそ

せぜしようじよう

敵

いちにん ほとけ

いちにん

いて、世々生々にかたきとなりて、一人は仏なり、一人

むけんじごく

かこ こと

たこく こと

は無間地獄にあり。これは過去の事、他国の事なり。

わ ちよう

いちのいん

讃 岐

いん

きようだい

我が朝には、一院・さぬきの院は兄弟なりしかども、

くらい 争

敵

たま

いま じごく

位をあらそいて、ついにかたきとなり給いて、今に地獄に

とうせい

眼 当

よ 危

やおわすらん。当世、めにあたりて、この代のあやおきも

きようだい

争

起

たいしやうどの

もう

けんじん

くろう

兄弟のあらそいよりおこる。大将殿と申せし賢人も、九郎

ほうがんと

しやていとう

滅

たま

わ こ

みな

判官等の舎弟等をほろぼし給いて、かえりて我が子ども、皆

しよじゆうとう

うしな

たも

がんぜん

こと

所従等に失われ給う。眼前の事ぞかし。

殿 原

ににん

じようげ

殿

欲

とのばら 二人は上下こそありとも、とのだにも、よく

深

こころ曲

どうり

知

たま

右衛門

ふかく、心まがり、道理をだにもしらせ給わずば、えもん

たいふのさかんの

こと

親

勘

当

許

の大夫志殿は、いかなる事ありとも、おやのかんどうゆる

太夫

ほけきよう

しん

ほとけ

べからず。えもんのたゆうは法華経を信じて仏になるとも、

親

ほけきよう

ぎようじゃ

こ

勘

当

じごく

お

おやは法華経の行者なる子をかんだうして地獄に墮つべ

殿

兄

親

損

ひと

だいばだつた

し。とのほあにとおやとをそんずる人になりて、提婆達多が

まつだい

賢

うえ

よく

ようにおわすべかりしが、末代なれどもかしこき上、欲な

みう

さんにん

ほとけ

たま

父

方

き身と生まれて、三人ともに仏になり給い、ちちかた、

母方

類

救

たも

ひと

そつら

ははかたのるいをもすくい給う人となり候いぬ。

殿

ごしそくとう

末

よ

栄

思

また、とのの御子息等も、すえの代はさかうべしとおぼし

いちだいししようぎよう

ひ

ひやくせん 枚

書

めせ。このことは一代聖教をも引いて、百千まいにかく

尽

思

瘦

病

もう

み

とも、つくべしとはおもわねども、やせやまいと申し、身も

苦

そうら

ことごとく

くるしく候えば、事々申さず。あわれ、あわれ、いつか

見

参

い

もう

そうら

げんざんに入つて申し候わん。

向

そうら

また、むかいまいらせ候いぬれば、あまりのうれしさに

語

そうら

そうら

粗

々

もう

万

こころ

かたられ候わず候えば、あらあら申す。よろずは心に

推

量

たま

にようぼう

おんこと

おな

喜

もう

すいしはからせ給え。女房の御事、同じくよろこぶと申さ

たま

きようきようきんげん

せ給え。恐々謹言。